



言葉が通じなくても伝わる心

大切なのは理解しようとする気持ち

言葉だけでなく、心でも通じ合えることを知ったホストファミリー。交流がもたらしたものは心の成長でした。



笑顔で別れようと気持ちを「スマイル」と頬に指をあて表現。マティス君から自然とこぼれる笑顔は気持ちが伝わった証拠

ホストファミリーの「またね」の呼び掛けに振り返るヘルビッヒ君。目に涙が溢れていた

上山での交流はあつとう間に過ぎていきました。かみのやま温泉駅に集合したホストファミリーと訪問団。ホームでは目頭を熱くさせながら、遠い国から来た学生たちの温もりを忘れないよう固い握手を交わすホストファミリーの姿がありました。

午前9時15分に新幹線が到着すると、ホストファミリーとの思い出がたくさん詰まったカバンをお父さんやお母さんの手から渡されド市の学生たちは上山を後にしました。

取材を通して、いろんな年代を越えて、心と心が通じ合うシーンがありました。生活を共にし、上手な英語が話せなくとも、理解しようという気持ちがあれば一緒に笑うことができたホ

ホストファミリー同士で協力し、受け入れに取り組んだ家族もあり、ド市学生訪問団をきっかけにした、交流の輪は市民同士の交流になりました。みなさんが海外で活躍すること、生活に刺激が生まれ、かけがえのない時間を過ごすことができ、長年交流したような心の繋がりを築くことができます。

今年で17年目を迎えるド市と上山市との交流は、名取市への義援金の寄付や、ド市との友好都市盟約15周年を記念し実施された「斎藤茂吉の道」の開設などへ発展しています。

ホームステイの受け入れは、心を育て、国際交流の一番の近道です。交流の輪は国境を越え、心を通じて、たくさんの人々の心を繋いでいます。まずは、身近なところから、異文化・心の交流を始めてみませんか。

広がる交流の輪

※来年は、上山の学生訪独団出発する予定です。



ホストファミリーとド市学生訪問団のみなさん。肩を組んで写真を撮ったり、新幹線が出発するまでの間、手を繋いでいた子どもたち。「家族が減るのはさみしい」と別れ際に話していた。またいつか会えると信じ、出来れば「冬の上山も紹介したい」と次に会えることを楽しみにしていた



▲上山明新館高校の生徒会メンバーが見送りに駆けつけた

▲「泣かない」と決めたが寂しさがこみ上げる

▲新幹線に乗り込んだ学生たちに手を振る家族。姿が見えなくなるまで手を振り続けた



遠い国から来た「家族」との別れ

ストファミリー。緊張しながらも相手の目を見て、片っ端だけ、真っ直ぐに学生とはしゃぐ園児。どれも心と心がぶつかっていきました。外国人と交流するうえで、言の英語で思い伝えられた高校生。「遊びたい」という気持ちと、「遊びたい」という気持ちとは違います。人が持つ「心」には違いはありません。心が通じ合うためには、お互いの心と心が寄り添い、相手の表情や目から見て、何を考えているのか理解する気持ちが大切です。まずは、直接触れ合つてみるとが、言葉の壁を越える一歩となります。

また、村越さん一家では家族で基礎英語の勉強を始め、井上さん一家では子どもが視野を広く持つて行動するようになり、家庭に変化をもたらしたと言います。特に学生訪問団と同世代の子どもたちは、「次回の訪問団に参加してみたい」「留学してみたい」と一歩を受けたようです。